川崎医療福祉学会誌　Vol. 18　No. 2　2009　361–372

原　著

ソーシャルワークの洞察形式に関する基礎的研究
— 構造・機能・意味に基づいた洞察形式の接合からの考察 —

直　島　克　樹[*1]

要　　約

本研究は，ソーシャルワークにおける新たな洞察形式を構築する研究の一環である．本稿では，これまでのソーシャルワークの洞察形式を，構造・機能・意味の観点から整理し，その整理された洞察形式の接合を図る．そこでは自己組織性が接合を説明する原理として位置づけられることになり，そこから新たな洞察形式を導くことを目的としている．

ソーシャルワークの洞察形式は主に 3 つの流れに整理することが可能と考える．第一の流れは要素還元主義に基づいた心理・精神構造，あるいは社会構造に問題の原因を帰結させるものであり，ソーシャルワークの科学化の発端となった．第二の流れはシステム理論，生態学に基づくものであり，機能的側面を重視した相互作用を説明するものである．構造 — 機能の観点から第一の流れを視野に組み込んでおり，現在最も主流ともいえる洞察形式である．これに対し，第三の流れがエンパワメントやストレングス視点に基づくものであり，人間の個々の意味を重視する洞察形式を主張するものである．近年のソーシャルワークでは，この第三の流れが強調されてきているが，人間の現実的な生活を捉える上では構造 — 機能的側面を無視することはできず，いかにして意味的側面を接合するかが問われてくるのである．

機能合理性を優先する社会を前提として考えてきたこれまでのソーシャルワークの洞察形式では，人間個々の意味は機能性に還元され，その同一性が重視されてきた．しかしながら，新たなソーシャルワークの洞察形式を考えるとき，人間個々の意味の差異性を重視し，そこから機能を問うていかなければならない．同一への調和ではなく，差異から生じる力動性に重点を置くことが必要なのである．この力動性を捉える新たな原理が自己組織性なのであり，その自己組織性が生じる世界では，波動的に捉え，螺旋的に循環していくソーシャルワークの洞察形式が示唆されるのである．

1．はじめに

少子高齢化社会への突入，IT 技術の進歩など，様々な要因が絡み合い，近代社会は，大きな転換期にある．近年の社会福祉・地域福祉における内発的発展への関心[1)]は，その現れともいえる．これからの社会福祉は地域福祉を中心に進められていくが，野口[2)]によれば，その展開に関して必要となる方法が内発的発展なのである．内発的発展は，それぞれの地域が自らの文化に適した発展を創りだすことを導く社会理論であり，近代化論に対して強く反省を迫るものである．ソーシャルワークにおいては，そういった近代社会の見直し[3)]を無視することはできない．これまでの社会福祉は啓蒙思想[†1)]によって構築された理性的，合理的且つ能動的な人間観を前提にその政策，実践が考えられてきた．それに対し，脱近代化の中でのソーシャルワークは，本来そういった “強い自己” に対する人間観の見直しと，合理性の追求など，機能を優先する社会そのものの反省を主張するものとして考えなければならない．すべての人間が環境さえ整備されれば自らの生活をコントロールできるわけではない．また，機能優先の社会においては，あらゆる人間の意味は機能合理性に収斂され[3)]，人権に代表されるような，個々に異なる存在としての意味[†2)]が，社会的機能の同一性に埋没してしまう．ソーシャルワークが重要視するそういった意味を主体的に捉え，そこからの内発的ともいうべき力動性がみえてこないのである．これらの限界を踏まえ，ソーシャルワークはその従来の

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
（連絡先）直島克樹　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-Mail: k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp

洞察形式を変更しなければならないであろう．

ソーシャルワークにおける対象や事実の捉え方であり，実践を導くものでもあるその洞察形式には3つの大きな転換期がある．第一に，ソーシャルワークが科学化を求められた20世紀前半は，要素還元主義に従った洞察形式が主流であり，精神分析や心理学の知見が進んで取り入れられた．診断主義，機能主義はどちらもその範疇に含まれることになる[†3)]．第二に，20世紀中盤から後半にかけては，要素還元主義に従った断片化の反省のもと，一般システム理論を積極的に取り入れていくことによって，部分に対する全体の影響が考慮されるに至った．生活モデル，エコシステムなどもこの範疇に組み込まれよう．第三の流れは第二の流れと同時に進行しているといえるが，人間の強さの再確認，病理的視点の克服のもと提起されたエンパワメントであり，ストレングス視点であった．この流れは，近代の機能合理性至上主義に対して，人間の個々の意味を重視させる方向性へとソーシャルワークをシフトさせる可能性をもったものである．

これら3つの洞察形式はそれぞれ重要な意味をもっているが，現在のソーシャルワークにおける洞察形式において，これらを統一的に連続体として把握する原理は明らかにされていない．そこで本稿では，特に第三の流れとの接合を図り，新たな洞察の端緒を見出すことを目的としている．つまり，人間としての個々の意味を重視するソーシャルワークのためには，意味を機能性と同質に捉えるのではなく，むしろ意味的側面の差異を捉え，そこから機能を考えていく洞察形式を構築していかなければならないのである．そのため，第一の流れの構造性を包含し，機能的洞察を可能にしたシステム論に基づく第二のソーシャルワークの流れの反省のもとに，エンパワメントなどの第三の流れを位置づけ直す必要があると考えている．なぜならば，Swenson[4)]が指摘しているように，ソーシャルワークが観点とする生活は様々な変数が絡み合った複雑な世界であり，それを説明するためにはシステムという概念が必要となるからである．ソーシャルワークにおける原理研究において，生活の現実的な側面を捉える上で，システムという概念は必要不可欠なものである[5)]．ソーシャルワークが人間の現実的な生活にかかわる限り，システム理論を無視することはできない．特に，今後の社会の動向が人間としての個々の意味を重視したものとなっていくとすれば，その点を重視するエンパワメントなどと，機能性を重視するシステム理論を接合する洞察形式をソーシャルワークはもたなければならないであろう．よって以下では，このことを念頭に置き，先ずそれぞれ3つの洞察形式を今田[3)]の考えに基づき整理した後，その接合のための新たな原理としての自己組織性やそこからの波動的関係性の可能性について考察していきたいと思う．

2．ソーシャルワークにおける要素還元主義の影響 — 第一の洞察形式：構造的アプローチの形成 —

理論というのは現実の世界をそのまま説明するものではなく，どのように捉えるのかという洞察形式でしかない[6)]．どのような実践においても，そこにはその実践者が依拠している捉え方，洞察形式が存在している．ソーシャルワークにおける洞察形式を再考するに当たって，ここではまず始めにソーシャルワークにおける科学化の出発ともなった要素還元主義について，その影響も含め明らかにしておく必要がある．そこで本節では，要素還元主義の特徴と，そのソーシャルワークへの影響について考察していきたい．

要素還元主義の中核をなすのが機械論的世界観である．それは，自己を世界から疎外し，自然との分離に向かう意識のことであり，簡単に言うならば，「分解し，測定し，寄せ集めよ」ということを表している[7)]．要素還元主義的な分析で捉えるところのものは，世界を，原因と結果，動機と行為が直線的に結びついた予測可能な存在と捉える線形現象である．すなわち要素還元主義とは，複雑なものに出会ったとき，その本質を知るために複雑なものをまず単純なものへと「分割」し，その分割したものをそれぞれ詳しく調べて「分析」し，その分析の結果を集め，「総合」を行うものである[†4)]．近代科学は，この要素還元主義に成立をみたのである．そして近代文明も，この要素還元的な発想をもって構築されてきたのである．

1915年のAbraham Flexnerのスピーチにおいて，実践の基本的メソッドがないなどの理由によって，ソーシャルワークが専門職ではないと位置づけられたことは有名である[8)]．それにより，ソーシャルワークに専門職としての科学性が求められる社会的背景が加速していった．その背景のもと，専門的職業としての確立を目指す中で，医学，特にFreudの精神分析に依拠しようとする動きが生じた．当時，ソーシャルワークの関心が従来の貧困層に加え，戦争，不況などを契機に中流階級以上にも広がっていたことも一つの要因ではあった．ただ，Freudの考えというのは，専門職ではないとされたソーシャルワークにとって，「効果的な介入，実践の『科学的』根拠，専門職業が発達するための組織化の枠組みに

希望を与えた」[9] のである．Freud の考えは，精神的，心理的構造に問題の原因があることを強調する．それはまさしく物事を可能な限り細分化していくという科学の主流に沿うものであったのである．それはソーシャルワークの科学化の大きな一歩であったといえよう[†5]．

精神・心理面に焦点を当てる援助が隆盛していく一方で，社会的側面に問題があるとするソーシャルワークの流れが生まれる．当時の社会は産業革命・世界大戦を経て，資本主義が急速に発展していた時代であり，貧富の差は激しさを増していた．当時の社会主義運動は，その状況を如実に表している．そこでは貧困の根本的原因は，社会的側面にあることが強調されたのである．このときから，時に対象は心理面にあるとされ，時には社会にあるのだとするといったように，対象認識に関する振り子現象ともいうべき状況がソーシャルワークの世界の中で続いていくことになるのである[10]．ソーシャルワークの世界では，科学的であろうとするがゆえ，要素還元法に従った単一的な因果の追求がなされた．それは技術を三分法化（ケースワーク，グループワーク，コミュニティ・オーガニゼーション）し，それぞれの技術がみずからの専門性を高めようとすることによって，対象への直線的思考がさらに強化されることになった．このように，この当時のソーシャルワークは基本的に精神・心理的構造に問題があるとする立場と，社会的構造に問題があるとする立場に洞察形式が二分化されていた点に特徴がある[†6]．あらゆる問題はいずれかの構造に帰結するのであり，その構造に従って対処法が考案されていた．それはソーシャルワークの構造的アプローチと考えられるのである．

しかしながら，人間の抱える生活における問題や困難とは，直線的で単一的な構造的原因に帰結するものばかりではないし，ましてや対象の認識を退けて方法が優位に立つものではない．岡本[10] も述べているように，直線的因果論とは，「人間界に生起する事象の因果関係を微にいり，細をうがって分析し，解明しようと試みるもので，これが高度化すればするほど部分が明らかになる半面，全体像や周辺との関連や状況との関連性が等閑視され，ときには無視されるという状況になりかねない」のである．人間の生活に生じる問題は，断片化することによって理解できるものではない．そこでソーシャルワークは，認識の転換を可能にするシステム論，とりわけ一般システム理論の考えを導入することによって，機能的側面を取り入れ，構造的アプローチの限界と反省を乗り越えようとしたのである．ここにソーシャルワークにおける第二の洞察形式の流れが生じることになるのである．

3．システム理論に基づいた洞察形式の特徴と問題点 — 第二の洞察形式：構造 — 機能的アプローチの形成 —

システム理論に基づいた洞察形式を第二の流れとして位置づけるその理由は，システム理論が断片化を乗り越え，全体性を考慮に入れた相互作用としての機能的観点をソーシャルワークにもたらしたことにある．様々な変数の交互作用を考慮するシステム理論は，一定の構造に比重をおくのではなく，それを並列的に捉えることを導いたのである．こういったことは，心理的側面か社会的側面かといった振り子現象に陥っていたソーシャルワークにとって，特に大きなインパクトをもつものであった．

ソーシャルワークにおけるシステム理論という場合，それは主に一般システム理論を指している．一般システム理論は Bertalanffy[11] によって体系化されたものであり，システムの開放性，フィードバック，エントロピー，定常状態といった概念を示し，ソーシャルワークはそういった概念を洞察形式に組み込んだ．一般システム理論の最大の貢献は，物事の全体と部分の関係に着目したことにある[†7]．そして，様々な概念をもたらすことによって，ソーシャルワークに機能的視点を埋め込み，包括性を欠いた援助法の限界を乗り越えるための方向性を示したことにある．これらの役割を果たした中で代表的なのが，Gordon Hearn[12]，Howard Goldstein[13]，Allen Pincus と Anne Minahan[14]，Max Siporin[15]，Beulah R. Compton と Burt Galaway[16] などのシステム理論を組み込んだ取り組みであった[†8]．

生態学に従うエコロジカル・モデルも含めて，これらシステムの概念を用いるソーシャルワークの一貫した関心は，社会的機能の確保にある[17]．近代国家の成立とともに発展してきたソーシャルワークにとって，社会的機能の確保は，近代国家の求める機能合理性を個々の生活においていかに達成し，そこに社会的な適応状態を成立させることでもある．そこでのソーシャルワークは，社会に機能的に適応することを支援するものとなる．近年，自己実現，自己決定がソーシャルワークの重要な目標として改めて見直されているが，このようなソーシャルワークの理解に従う限り，自己決定や自己実現は機能的側面に覆われることになる．つまり，機能合理性＝自己実現といった図式が成立することになり，人間そのものがもつ意味が機能性に包摂されてしまうので

ある．そしてまた，この機能優先と近代的人間観が組み合わさることによって，有能・無能の二分化など，多くの問題が生み出されるのである[18]．

システム理論を用いるソーシャルワークへの批判は，システム理論の機械的表現，またその抽象的性格にあるとされてきた[19]．また，人間的側面が軽視されることになったということも，批判の対象とされる[5]．つまり，ここで問題とされたのは，人間としての意味の問題でもあったと考えられる．Germainら[20]によって導入された生態学は，人と環境との適応的進化を説明するものであったが，それは基本的にはシステム理論の系譜であり，生活モデルなどの実践モデルも，適応としての機能的側面に関心があるものとして整理されるのである．それはエコシステム[21]においても同様[†9]であり，存在の意味を問う解釈的視点をもたず，システムと環境との機能的関係を説明するために構築されたものといえよう．結局のところ，システム理論を用いようが，生態学を用いようが，両者を合わせて用いようが，システム，つまりは人と環境との接触面，相互作用に言及することに変わりはない．そこで焦点とされるのは，相互作用のあり方，すなわち相互作用としての機能であり，それを生み出す構造なのである．これらの点から考えて，ソーシャルワークにおける第二の流れは構造 — 機能アプローチとして位置づけられると考える．

本来，自己実現などは，機能的側面に属するものではなく，人間としての意味的側面から議論されるべきものである．人間の存在としての自己実現が必ずしも社会機能的に合理性があるものばかりではない．社会の機能的側面のみに包摂されない自己実現こそ，価値の実践としてのソーシャルワークにとって重要かつ必要不可欠な課題であろう．特に，近代国家が求めた物質的豊かさがある程度成熟した社会においては，同質性よりも差異性を求める動きが活発化してくる[3]．近代国家では，人間の存在としての意味は，機能合理性と等価であり，社会的機能の確保を目指すこれまでのソーシャルワークとは，その人その人がもつ存在の意味を，機能合理性に収斂させてしまうものでしかなかったのではなかろうか．ソーシャルワークにおいて，近代の枠組みでシステム理論を用いる限りこの問題は理論的に避けられない．ソーシャルワークは価値の実践といわれており，人間の存在の意味を主張していく側面を原点として位置づけていかなければならない．その一つの現れが，本稿で第三の流れと位置づけるエンパワメントであり，ストレングス視点だと考えられる．次節以降ではこの点について説明を試みると共に，第二の流れと第三の流れを分節化するのではなく，その接合の可能性について考察してみたい．しかし，この接合とは機能と意味をイコール（静態性）として捉えるものではない．むしろその力動性を重視するものである．この接合こそ，今後ソーシャルワークに求められる視点であると考えられるのである．

4．エンパワメント，ストレングス視点に基づいた洞察形式の意義と特徴 — 第三の洞察形式：意味を問うアプローチの形成 —

エンパワメントは，近年のわが国の社会福祉における動向，特に自己選択・自己決定を進めていく上で重要な考えとなっている．すでにそういったエンパワメント概念の重要性は多くの研究者によって示されてきている[22−27]．本節ではそのエンパワメントと，それに結びつくストレングス視点との意義と特徴について考察を加え，新たな洞察形式への足がかりとしたい．

エンパワメント概念は，1950年代から60年代にかけて台頭した民権運動などの，黒人に対する差別撤廃運動内におけるソーシャルワークからの取り組みの中で見出されていったものである[†10]．この概念が注目された背景としては，従来のソーシャルワークの洞察形式が構造，機能的に人間を捉えてしまうことへの反省が大きい．人間は機能不全に陥った受動的で力のない存在ではなく，より主体的であり，尊厳をもち，常に成長していこうとする存在としての価値（意味）に基づいたソーシャルワークが目指されたのである．その特徴を整理するならば，①個人的変革から社会的変革までをも視野に入れている[28−30]，②自己制御と自省作用としてのパワー[31,32]，③主体性の積極的評価[31,33]となり，それらに貫徹されている一つの前提が，人間そのもののもつ存在的価値の強さであると考えられる．ここではこの前提に着目し，議論を進めていきたい．

機能性に包摂されない人間の意味を強調することは，啓蒙思想以降構築されてきた近代的人間観を問い直し，近代社会そのものを見つめ直すことを意味している．近代社会においては，機能合理性を絶対とし，その点から人間の価値が重視された[3]．それは一定の効果をもつ点でソーシャルワークの立場から評価できる．つまり，徹底した機能的能力主義をとることにより，民族や人種，宗教といった構造的差別を取り払う力を持っているからである．しかしそこには問題点もある．人間は，機能的成果を確保出来るか出来ないかで評価され，様々な理由による機能不全の状態に対して援助するのがソーシャルワークの役割と位置づけられてしまうのである．例え

ば，能力のあるものないものという二分化を成立させてしまうのである．この洞察形式は前節で整理した第二の流れに沿うものであり，現在においても有効な考え方である．これに対し，特にストレングス視点は，エンパワメント概念以上に上述のソーシャルワークの病理・欠陥モデルの克服を強調し，専門家が上位に位置し援助する構造を否定している点に特徴がみられる[34,35]．ストレングス視点の特徴は，機能的成果，機能合理性のみに帰結しない人間のもつ存在としての意味を評価する点にあり，それは近代社会における人間を相対化し，近代社会そのものに対しても異議を唱えるものである．

こういった機能性に還元されない人間の存在としての意味を評価する傾向は，必然的に差異性を強調するソーシャルワークへの移行を促す．すなわち，そこにある理念は，共同性よりも共生であり，機能的な同質性・同一性の確保を援助していくソーシャルワークから，個々のもつ意味の差異を評価し，認め合うソーシャルワークへと変化していくことになるのである．ソーシャルワークはこの意味的な差異を認めた上で，機能性を議論するものでなければならない．それは，構造 — 機能アプローチから意味を問う第三のアプローチの現れであり，自らの意味を自省的に振り返り，意味づけをポジティブに変化させていく，特に個々の持つ言説，物語的な側面へのかかわりに重点を置く近年のアプローチ[36,37]にみられる特徴といえよう[†11]．

しかしながら，こういったエンパワメントやストレングス視点とネットワークの議論が同時になされる場合には特に注意が必要である．ソーシャルワークの分野において，ネットワークの主張は非常にポジティブに捉えられがちであるが，構造や機能といった観点から捉えた場合，ネットワークは機能合理性といった近代社会の目標を達成するための典型的な手段ともなる[38]．ソーシャルワークにおいて，二分法的に主体と環境を完全に分離し，社会資源の議論と絡めるときに特に陥りやすい．エンパワメントやストレングス視点を議論する場合には，この機能合理性の追求とその目的を同じものとして捉えるのではなく，むしろリゾームとしての側面を考慮に入れなければならない．人間の存在としての意味の差異的な側面から，機能性を捉えていかなければならないのである．

以上のように第三の流れとして整理したソーシャルワークの洞察形式は，システム理論のもつ構造 — 機能性に対し，意味の強さを強調するものであった．ここまでの歴史的なソーシャルワークにおける洞察形式の 3 つの流れをベクトルで整理するならば図 1 のようになろう．第一の流れはソーシャルワークの科学化・専門職化が求められたことを背景に，精神・心理構造，あるいは社会構造に因果関係をみる構造モデルとしてのソーシャルワークの洞察形式である．しかしながら，福祉国家が形成されていく中で，対象認識の振り子現象など，要素還元的に単一構造に傾斜していくことは批判の的となる．そこで，機能的観点をもち，構造に還元されない，人と環境との

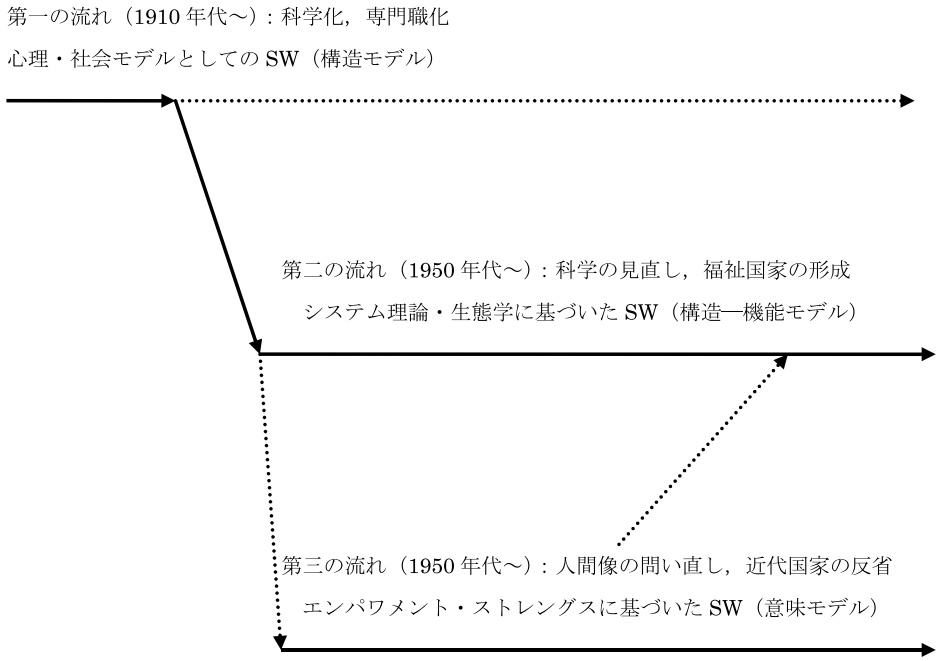

図 1　ソーシャルワークの洞察形式の流れ（ベクトル図）

相互作用を説明するために導入されたのがシステム理論であり，ここに構造 — 機能モデルとしての洞察形式の流れが成立するのである．それは第一の流れを包摂する形で表されるのである．これに対し，エンパワメントやストレングス視点など，人間そのものの意味を重視する洞察形式が第三の流れとして示される．システム理論を基盤とするソーシャルワークの関心は，社会の求める機能合理性に基づいた社会的機能の確保にあった．そこでは人間としての意味は機能合理性と同一に考えられ，あらゆることが構造と機能のみに吸収されてしまうのである．そのため本来人間が持つべき個々の意味としての差異がかき消されてしまうのであり，そこにソーシャルワークの立場から構造 — 機能主義の限界がみえるのである．第三の洞察形式は，この点に対する問題点を指摘する形態として捉えることが可能なのである．それは，構造 — 機能性に必ずしも還元されない人間の存在としての意味を問うソーシャルワークを実現するものとして考えられるのである．しかし，現代の社会においては構造 — 機能性をまったく無視して意味の側面を強調するわけにはいかない．これからのソーシャルワークの洞察形式を考えていくにあたって，構造 — 機能と意味という関係性を説明できる原理を設定することが必要である．それはまた，ここで整理した3つのソーシャルワークの洞察形式の接合に関連することであり，その点について次節で考察することによって本稿の結論としていきたい．

5．ソーシャルワークにおける洞察形式の接合に関する考察 — 自己組織性による二分法関係から波動関係をもった洞察形式への転換 —

ここまで，ソーシャルワークにおける洞察形式を，要素還元主義に従った心理・社会構造に基づくもの，構造的観点に動態性としての機能性を組み込んだシステム理論，あるいは生態学に基づくもの，そして，構造 — 機能性のみに還元されない人間そのものの意味を強調するエンパワメント，ストレングス視点に基づくものという3つの形式に整理できることを確認した．これらはそれぞれ置かれている時代の社会的背景とも絡めて展開されているものであり，時間軸的展開としてのベクトルとしてその流れを整理できるのである．近年，近代国家の見直しが進む中で，第三の流れとしての洞察形式が注目を集めているが，現実的な問題に着目するとき，ソーシャルワークは第二の洞察形式を無視できるものではない．本稿のはじめにでも述べたように，このそれぞれの洞察形式の流れを断片的に捉えるのではなく，連続体として接合していく点に，これからのソーシャルワークの新しい洞察形式があると考えられる．ここでは，その接合に対して必要不可欠な原理として自己組織性を示し，従来の循環的，ベクトル的でない，その螺旋的循環，波動的理解を考察することによって結論としたいと考えている．

現代の生活では，社会的機能の確保と人間の存在そのものがもつ意味を重視した自己実現は同時に成り立つことが必要である．この同質性を前提とし，強調してきたのが近代社会の特徴であり，これまでのソーシャルワークの典型的な洞察形式であった．つまり，従来のソーシャルワークの洞察形式に加え，これからの新たな洞察形式は，その同質性ではなく，差異性を強調し，対立や矛盾から生じる力動性を捉えるものでなくてはならない．それは，長年ソーシャルワークが主張してきた価値の実践としての洞察形式を理論化することに他ならない．そのためには，構造 — 機能と意味を二分法的に分断するのではなく，それを超えた連続的な関係性を捉えなければならないのである．むしろソーシャルワークは，この構造 — 機能 — 意味の連続性を一貫して課題としてきたのである．この連続性を示す関係性の原理として位置づけられるのが自己組織性[39]であり，ベクトルではない波動性を，単なる循環ではない螺旋的循環をソーシャルワークの洞察形式として形成していくものである．

自己組織性とはシステム理論の系譜に含まれるものであるが，システムのリフレクション（自省作用）を考慮に入れることによって，システムのポジティブなフィードバックを理論的枠組みに組み込むものである[39]．従来の構造 — 機能的観点から組み立てられる形式論理では，完全に独立した主体と客体を仮定していた．そこでシステムの自省作用を定式化しようとすると，自己の中にもう一つの自己を含むことになり，矛盾を抱えてしまう（主客の不可分性）ため，システムが本来備えている内破による変化を説明できないのである[†12]．その問題点を克服するため，これまで科学の範疇外であった意味的側面を構造 — 機能の側面と同等に扱い，接合させることが求められるのである．今田[39]によれば，「構造を機能によって問い，機能を意味によって問うていくと，あたかもメビウスの帯で表が裏に反転するかのように，意味が構造の問いに変換される」のである．つまり，意味の側面としての自己言及が，自省作用としてシステムの制御としての機能を問い，それが規則としての構造に入り込むことによって構造の自己言及が起きるのである．自己組織性とは，従来のシステム理論を超えて，二分法にとらわれない「関係

性」を説明する新たな原理となり，ソーシャルワークにとって必要不可欠な人間の価値を捉え，「対話」への途を拓くものとなりうるのである．

この自己組織性の原理を考えるとき，ソーシャルワークの洞察形式が，二分法的な決して交わることのないベクトル的形式に分断的に存在するのではなく，一つの連続体として螺旋的，波動的関係としての洞察形式が示される．これをソーシャルワークの立場から図示すれば図 2 のようになろう．すなわち，構造としての洞察形式，機能としての洞察形式，そして意味としての洞察形式が接合され，それが表裏一体となって波動的に展開していくのである．構造 — 機能 — 意味的側面は切り離して考えることができないものである．それは生活の論理でもあり，人間個々の価値としての意味を構造 — 機能性と接合したものとなるのである．そして，そこでは意味の差異性をキーワードとし，その差異が生み出すゆらぎにソーシャルワークの洞察形式を導くことになる

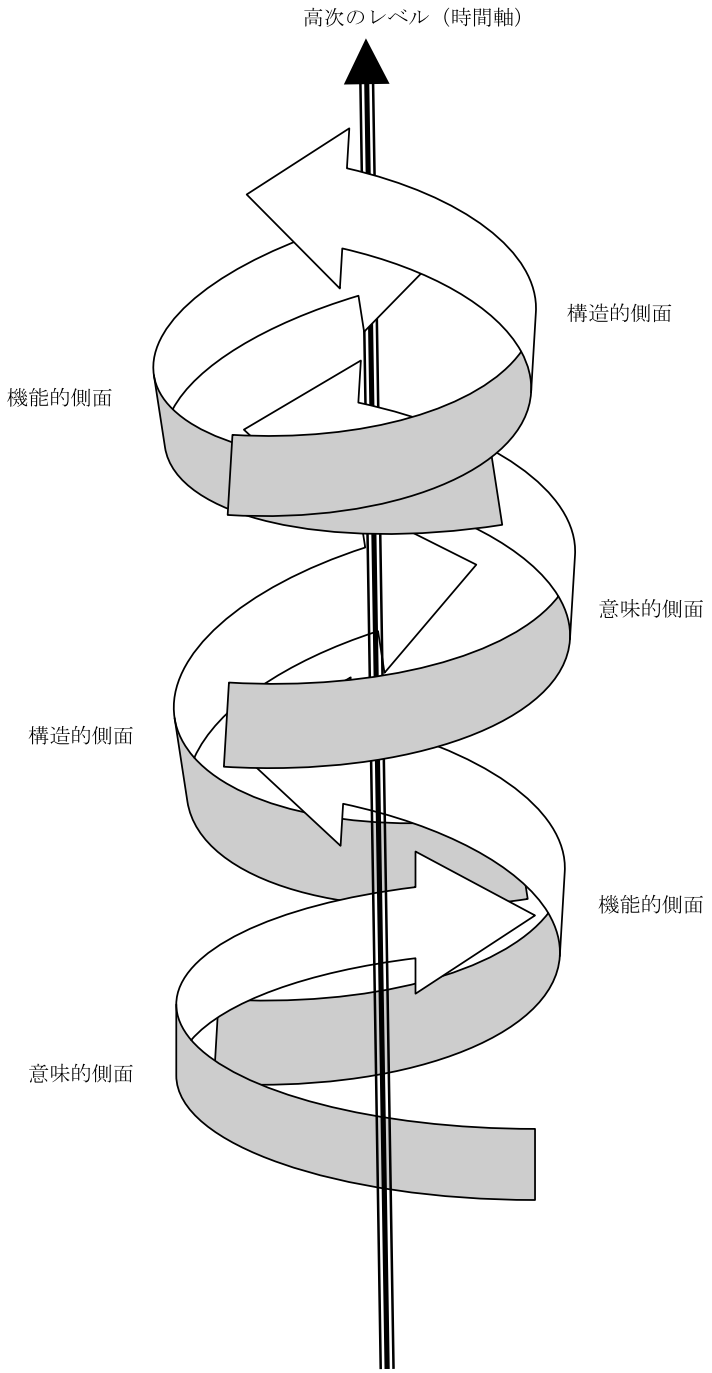

図 2　ソーシャルワークにおける新たな洞察形式の試案図（構造 — 機能 — 意味の波動的接合モデル）

のである．

人間そのものの意味を組み込んだソーシャルワークにおいて，このゆらぎに着目することは，単なる機能性の違いを強調し，機能的な同一性の達成から平等を主張する従来の洞察形式を克服するものともなる．人間を「有能」か「無能」かに判別する近代社会を超えて，その人のもつ意味の違いを認め，それを社会の中でどのように表現していき，また社会に認めさせていくか，その取り組みにかかわるのがソーシャルワークの果たすべき役割である．ゆえに，ソーシャルワークの洞察形式は，機能合理性を目指す認識と，それにとらわれない人間そのものの意味を重視した認識が交互にそして互いを巻き込みながら生じてこなければならない．ソーシャルワークは当然後者に比重を置くものであり，図2では，その入り混じりながらより高次のレベルへと展開していくことが示されている．そこでは，その意味のもつ差異を組み込んだ結果，自省性に基づいた内発的な変革を目指すということになるのである．以上のように，単なる機能的な適応ではなく，人間としての意味を重視した自己実現を目指すソーシャルワークを考えるとき，自己組織性という原理に基づいた波動的関係性としての洞察形式が示されることになるのである．

6．おわりに

本稿では，ソーシャルワークにおける新しい洞察形式を求め，その基礎作業として従来の洞察形式を，構造・機能・意味という三つの観点[3]から整理した．近年のソーシャルワークにおいては，システム理論や生態学に基づいた洞察形式（構造 — 機能）と共に，エンパワメントやストレングス視点に基づいた洞察形式（意味）が同時に主張されている．ここまでの考察において，その接合にこそ新たな洞察形式があると考え，一つの原理が自己組織性にあると導いたのである．構造・機能・意味が作用しあい，特に意味のもつ差異性を重視する自己組織性は，ソーシャルワークにおける洞察形式を接合し，人間としての意味を重視する価値としての実践に必要不可欠な原理と考えなければならない．構造 — 機能が優位なソーシャルワークでは，機能合理性が求められ，人間としての意味は機能的に扱われ，常に同一性としての共同が問われるが，意味の側面を考慮に入れたソーシャルワークは，同一性よりも差異性を強調し，その違いをいかにして認め合っていくか，そこから新たな機能合理性を達成していくかという共生を考えるものとなるのである．この考察より，ソーシャルワークの洞察形式は自己組織性という構造 — 機能 — 意味の螺旋的循環として，交互に入れ替わり，入り交じる波動的関係の中で考えていかなければならないことがわかるのである．

しかしながら，ここでの取り組みはあくまでも基礎的研究でしかない．ソーシャルワークにおいてその洞察形式の原理として自己組織性を位置づけることに関しては，今後詳細に検討しなければならない課題も残っているが，ソーシャルワークの発展に対する貢献への可能性を秘めたものであることは確かである．機能的同一性を目指すソーシャルワークから，意味の差異性を前提としたソーシャルワークへ，そして，生活の個人化と関係性を同時に捉えながらその内発的発展を促すソーシャルワークを考えていくには，新たな科学観に基づいた原理を位置づけることは必要であると考えられる．本稿で示した自己組織性とそこから主張する波動的関係は，このための第一歩なのである．

注

†1）啓蒙思想とは，17世紀後半から18世紀にかけて，ヨーロッパを中心に展開された思想運動のひとつである．ソーシャルワークは，科学に基づいた近代社会の形成とともに体系化が目指されてきたものであるが，啓蒙思想はこの科学の形成に大きな影響を与えている．すなわち，17世紀までの科学とは，神（特にキリスト教）に対する賛美として成立し，神の権威や計画を明らかにするものでしかなかった．しかしながら，ヨーロッパを中心とした思想運動のひとつである啓蒙思想は，人間の理性を重視し，神の前に消極的存在でしかなかった人間に積極的意義を与え，現在の科学を構築してきた思想として考えられなければならない．直島は[18]，啓蒙思想による科学から共生思想としての科学を考察し，新たな社会福祉理論の構築を目指しており，本稿での議論との関連を今後検討していかなければならないであろう．

†2）ここでの「人間の意味」とは，人権で示されているような人間存在の価値である．それは量ではなく，質を問うものである．後述するエンパワメントやストレングス視点も，これまでのソーシャルワークが個人の機能不全や障害に焦点化し，社会的コントロールを強化してきたことを反省点にあげ，人間の尊厳の権利に立脚したものと考えられる．そしてこの人間存在の価値という強さに立脚し，個々の人間の可能性そのものの展望を開いていくことを目的としているのである．

†3）機能主義とは，Otto Rank の考えに従い，人間の潜在的な可能性や創造性を認める心理学に基づくものである．その最大の特徴は，援助を提供する機関がソーシャルワークに重要な意味を持つと考える点にある．ただ，実践そのものについては，診断主義とまったく異なるともいえず，問題の原因を心理的構造に求めていた点では要素還元的であり，焦点の当て方，コンセプトの設定の仕方が異なっていたと考えられる．

†4）要素還元主義の影響は，現在においてもいたるところで散見することができる．例えば，経済学，物理学，生物学あるいは社会福祉学などは，それぞれひとつの研究・学問分野を形成しているが，一つの分野の中でさらに分野が細分化されている．また，行政や企業の部署なども非常に細かく分けられている．本稿では，この要素還元主義に基づいた細分化が必要ないと主張しているわけではない．必要最小限の細分化による単純化は不可欠である．ただ，生活の全体性（holism ではない）を根本とするソーシャルワークにとって，要素還元主義的に洞察形式を構築していくことの問題点を指摘しているのである．

†5）嶋田は，個別科学の集中を科学として考え，そこに社会福祉の専門化を位置づけることは，社会過程を見誤り，人間生活と福祉に破壊的結果をもたらすと述べている[40]．一方で，心理・精神的側面への傾斜が，専門職としての確立に貢献したということを忘れるべきではないとも強調している[41]．

†6）Richmond は，Freud の考えにはあまり好意を示さず，生活における関係性を重視し，心理・精神的側面と社会環境的側面の両者の視点を統合することを意図していたが，当時の時代の流れは，その考えを洗練するには至らなかった[42]．

†7）一般システム理論が考えられた背景には，機械論と有機体論との歴史的な対立があり，そもそも有機体論の性質である秩序・全体性・目標指向性・成長・分化などを機械論の中に取り込むために提出されたものである[43]．その点を考えれば，システム理論は機械論を完全に否定しているわけではなく，それを取り込んでいるといえよう．

†8）例えば，Pincus と Minahan は，ワーカーが自らの役割を遂行していくために関わるものをシステムとして考え，チェンジ・エージェント・システム，クライエント・システム，ターゲット・システム，アクション・システムとして，多次元でのシステムを考慮した援助構造を示している[14]．こういった捉え方は，援助方法の統合化に大きく貢献した．

†9）エコシステム論にとっては，適応はソーシャルワーク実践の焦点のひとつでしかない[21]．可能な限り中立的な方法でシステムの交互作用を説明し，変数を組織化するための方法を提供している[44]．

†10）松岡によれば，エンパワメントはポストモダンとの関連で指摘されることが多いが，特に新しいものではなく，ソーシャルワークがその当初から重要とみなしてきたものである[45]．

†11）例えば，社会構成主義に従うならば，言語が世界を構築していることになる．この言語を交える対話が自己観察と批判的思考の進展をもたらす．そして対話が媒介となり，批判的な思考が促進されることによって，現実が再構成されると考えるのである[46]．

†12）この点は内発性の欠如として考えられよう．一般システム理論は，システム — 環境図式に基づくものであり，理論的にはシステムの構造的変化は外部に求めるしかない．環境に由来する外生因での変化と，システム自身に由来する内生因での変化という区別がなされているが，一般システム理論は後者の仕組みを明らかにするには至っていない[38]．一般システム理論は，システムが平衡状態にいたることのないように，システムの安定した状態（＝定常状態）をいかに維持していくかを問うものである．システムのフィードバックや等結果性などといった考え方も開放系を基盤として考えられることであり，一般システム理論はその中でも構造の保存や安定性に寄与する負のフィードバック制御に注目しているのである[47]．この点については，ソーシャルワークの立場から稲沢も，生態学・エコシステムの視点について，システムの変容理論を欠落させてしまっていると指摘している[5]．すなわち，負のフィードバックに基づいた理解では，システムの変容過程，特にその成長過程は理解することができないのである．それは個人から社会までを対象とするソーシャルワークにとって，多くの問題を孕む．システムの成長過程を理解するためには，正のフィードバックが位置づけられなければならない．以上の点は，後述する新たな科学観を取り入れる必要があるとする著者の主張とも関連しているものである．

文　　献

1）高田眞治：社会福祉内発的発展論 — これからの社会福祉原論 —．ミネルヴァ書房，2003．

2）野口定久：地域福祉論 — 政策・実践・技術の体系．ミネルヴァ書房，2008．

3）今田高俊：意味の文明学序説．東京大学出版会，2001．

4）Swenson C：Social Networks, Mutual Aid, and the Life Model of Practice．Germain C and Associates, *Social Work Practice：People and Environment*．Columbia University Press，213–238，1979．

5）稲沢公一：生態学的視点の理論的限界 — 社会福祉原理研究ノート〔I〕（論説）．社会福祉学，**33**(2)，163–186，1992．
6）Bohm D 著，井上忠訳：全体性と内臓秩序．青土社，2005．
7）Berman M 著，柴田元幸訳：デカルトからベイトソンへ — 世界の再魔術化 —．国文社，1989．
8）Blundo R：Shifting Our Habits of Mind：Learning to Practice from a Strengths Perspective．Saleebey D ed，*The Strengths Perspective in Social Work Practice*，Pearson Education，25–45，2005．
9）Kemp S，Whittaker J and Tracy E 著，横山穣，北島英治，久保美紀，湯浅典人，石河久美子訳：人 — 環境のソーシャルワーク実践 — 対人援助の社会生態学 —．川島書店，2000．
10）岡本民夫：ライフモデルの理論と実践 — 生態学的アプローチ —．ソーシャルワーク研究，**16**(2)，86–92，1990．
11）Bertalanffy L 著，長野敬，太田邦昌訳：一般システム理論．みすず書房，1973．
12）Hearn G ed：*The General Systems Approach*：*Contributions Toward an Holistic Conception of Social Work*．Council on Social Work Education，1969．
13）Goldstein H：*Social Work Practice*：*A Unitary Approach*．University of South Carolina Press，1973．
14）Pincus A and Minahan A：*Social Work Practice*：*Model and Method*．F．E．Peacock Publishers，1973．
15）Siporin M：*Introduction to Social Work Practice*．Macmillan Publishing Co．Inc．1975．
16）Compton B and Galaway B：*Social Work Processes*．Brooks/Cole Publishing Company，1999．
17）丸岡和則：ポストモダンと社会福祉 — 批評的ソーシャルワーク論 —．関西福祉大学研究紀要，**10**，41–49，2007．
18）直島克樹：社会福祉内発的発展論からみえる社会福祉理論の新たな展開 — 社会福祉における自己組織性への一考察 —．武田丈，小笠原慶彰，松岡克尚，横須賀俊司編，社会福祉と内発的発展 — 高田眞治の思想から学ぶ，関西学院大学出版会，207–232，2008．
19）中村佐織：アセスメント概念におけるエコシステム的視座の意味．長野大学紀要，**19**(2・3)，143–151，1997．
20）Germain C and Gitterman A：*The Life Model of Social Work Practice — Advances in Theory & Practice*，*Second Edition*．Columbia University Press，1996．
21）Meyer C：The Search for Coherence．Meyer C ed，*Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*，Columbia University Press，5–34，1983．
22）小松源助：ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題．ソーシャルワーク研究，**21**(2)，4–10，1995．
23）北野誠一：ヒューマンサービス，エンパワーメントそして社会福祉援助の目的．ソーシャルワーク研究，**21**(2)，36–47，1995．
24）齊藤順子：エンパワーメントを志向するソーシャルワーク実践の意味と課題 — プロセスにおける特徴を中心に —．同朋大学論叢，**77**，33–46，1998．
25）狭間香代子：社会福祉の援助観 — ストレングス視点・社会構成主義・エンパワーメント —．筒井書房，2001．
26）久保美紀：エンパワーメント概念の構造に関する研究 — ソーシャルワーク実践理論としてのエンパワメント —．明治学院論叢，**110**，175–195，2001．
27）佐藤豊道：高齢者分野におけるソーシャルワーク — 新たな時代状況とパラダイム —．ソーシャルワーク研究，**29**(3)，14–19，2003．
28）窪田暁子：アルコール依存者の回復をエンパワーメントの視点からみる．ソーシャルワーク研究，**21**(2)，11–20，1995．
29）三毛美予子：エンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践の検討．関西学院大学社会学部紀要，**78**，169–185，1997．
30）西梅幸治：ソーシャルワークにおけるエンパワーメント実践展開研究の意義．福祉社会研究，**4・5**，53–67，2004．
31）久保美紀：ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討 — Power との関連を中心に —．ソーシャルワーク研究，**21**(2)，21–27，1995．
32）渡辺裕一：ソーシャルワークにおけるエンパワーメント評価に向けたパワー構成要素の検討 — 一般的パワーを中心に —．ソキエタス，**9**，33–42，2002．
33）渡辺洋一：エンパワーメントを志向したソーシャルワークに関する一考察 — 社会福祉の固有性の視点から —．ソーシャルワーク研究，**21**(2)，28–35，1995．
34）Saleebey D：Introduction：Power in the People．Saleebey D ed，*The Strengths Perspective in Social Work Practice*，Pearson Education，1–24，2005．
35）Saleebey D：The Strengths Perspective：Possibilities and Problems．Saleebey D ed，*The Strengths Perspective*

in Social Work Practice, Pearson Education, 279–303, 2005.
36）加茂陽編：日常性とソーシャルワーク．世界思想社，2003.
37）加茂陽編：被虐待児童への支援論を学ぶ人のために．世界思想社，2006.
38）今田高俊：自己組織性と社会．東京大学出版会，2005.
39）今田高俊：自己組織性 — 社会理論の復活 —．創文社，1986.
40）嶋田啓一郎：社会福祉と社会体制 — 社会科学的方法論の探究．人文学，**97**，1–31，1967.
41）嶋田啓一郎：力動的統合理論とソーシャル・ワーク — 未来を約束する専門職活動．ソーシャルワーク研究，**7**(1)，2–10，1981.
42）小松源助：ソーシャルワーク理論の歴史と展開 — 先駆者に辿るその発達史 —．川島書店，1993
43）今田高俊：複雑系とポストモダン — 自己組織性論の視点から（講演）．今田高俊，鈴木正仁，黒石晋編，複雑系を考える — 自己組織性とはなにかⅡ，ミネルヴァ書房，6–85，2001.
44）Greif G and Lynch A：The Eco-System Perspective. Meyer C ed, *Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*, Columbia University Press, 35–71, 1983.
45）松岡克尚：精神障害者のエンパワメントにおける『障害者文化』概念適用の可能性と課題．関西学院大学社会学部紀要，**99**，15–130，2005.
46）久保美紀：ソーシャルワークにおける『正義』志向とストレングス視点．明治学院論叢，**112**，63–83，2002.
47）Jantsch E 著，芹沢高志，内田美恵訳：自己組織化する宇宙 — 自然・生命・社会の創発的パラダイム —．工作舎，1986.

（平成20年12月1日受理）

Basic and Leading Study for the Theory of Social Work — Consideration for the Connection of Insight Forms Based on Structure, Function and Meaning —

Katsuki NAOSHIMA

(Accepted Dec. 1, 2008)

Key words : structure, function, meaning, self-organization, wave relationship

Abstract

This study constitutes a part of the project which aims to develop a new insight form. We intend to reorganize the insight form adopted previously in social work into a unity of structure, function and meaning, in which self-organization is considered a principle conducive to our objective.

The insight form in social work can be divided into three theories. The first theory, which contributed to the refinement of social work into a science, attributes all problems to mental, psychological and social structures. The second theory, rooted in a system theory and ecology, explains human-environmental interaction with an emphasis on function: this theory, currently the most authentic, incorporates the first one into a structure-function perspective. The third theory, based on the ideas of empowerment and strength, focuses on the importance of individuals. While the third theory has attracted the most attention in recent years, what remains to be done is unification of the aspects of meaning with those of structure-function.

In response to a society oriented in function-rationale, the insight form of social work has so far reduced the meaning of individuals to mere function and placed emphasis on equation. However, a new insight form ought to address individual differences rather than function, in other words, the dynamics derived from difference rather than equation. Self-organization provides the driving force for the dynamics of this mechanism. A new insight form of social work will be founded on wave relationship and spiral circulation in a society built on self-organization.

Correspondence to : Katsuki NAOSHIMA Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.18, No.2, 2009 361–372)